

宮崎市文化財調査報告書第45集

# 黒太郎遺跡

2000年3月

宮崎市教育委員会

## 序

平成10年度、本市では「第三次宮崎市総合計画」を策定いたしました。この総合計画では「豊かな心と創造性をはぐくむ教育文化都市」を基本目標の一つとして、地域性豊かな市民文化の創造を目指しております。文化財行政におきましては、文化財の保護・文化財の活用・伝統的文化の継承と活用・調査研究体制の整備充実という四つの施策に取り組んでおり、現在進めております生目古墳群史跡公園整備をはじめとする各事業を進めているところでございます。

本書は、携帯電話の電波基地局建設に伴い平成10年度に調査を行いました黒太郎遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書であります。黒太郎遺跡は、市北部南方町の水田地帯にあります。今回、ここでは弥生時代後期の壺や甕といった多量の土器や、石包丁・磨製石鎌・敲石などの石器が出土しています。現在のところ、この付近での発掘調査の事例はまだまだ少ないため、今回の調査がこの地域の古代史解明にむけて貴重な資料を提供することと思います。本書が学術研究や郷土の歴史研究の一助となれば幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査に従事された作業員の皆様、ご協力いただきました関係機関の方々に心からお礼申し上げます。

平成12年3月

宮崎市教育委員会

教育長 内藤 泰夫

## 例　　言

1. 本書は携帯電話電波基地局建設に伴う、黒太郎遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は宮崎市教育委員会が平成10年9月28日から11月14までの期間実施した。
3. 調査組織

調査主体 宮崎市教育委員会

文化振興課	課長	野間重季
調査総括	文化財係長	永井淳生
調査事務	主事	竹野隆司
調査員	技師	鳥枝誠
	技師	時任直也（平成10年度）
	技師	福岡洋道
	技師	宇田川美和
整理担当	主査	田村泰彦（平成11年度）
	技師	宇田川美和
補助員	嘱託	椎山美子
	嘱託	小川正子
	嘱託	松永光雄
	嘱託	久富なをみ
	嘱託	河野賢太郎（平成11年度）

4. 本書の執筆は田村・宇田川が行った。
5. 掲載した図面の実測、製図、図版の作成は鳥枝・時任・福岡・宇田川・椎・小川・松永が分担して行った。
6. 現場における写真撮影は鳥枝・時任・福岡・宇田川が、遺物写真撮影は河野が行った。
7. 本書の編集は宇田川・久富が行った。
8. 発掘調査により出土した遺物及び調査における図面・写真等は宮崎市教育委員会で保管している。

# 本文目次

第1章 はじめに	
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 遺跡の立地と歴史的環境	1
第2章 調査の成果	
第1節 調査の概要	7
第2節 遺構及び遺物について	8
1・溝状遺構について	8
2・周溝状遺構について	13
3・土坑について	14
4・その他の遺構・遺物について	17
第3章 まとめ	20

# 挿図目次

第1図 黒太郎遺跡位置図 (1/50,000)	3
第2図 黒太郎遺跡周辺図 (1/25,000)	4
第3図 黒太郎遺跡全体図 (1/100)	5
第4図 黒太郎遺跡上層断面図 (1/40)	5
第5図 1号溝状遺構出土遺物実測図 (1/3)	8
第6図 3号溝状遺構出土遺物実測図・1 (1/4)	9
第7図 3号溝状遺構出土遺物実測図・2 (1/4)	10
第8図 4号溝状遺構・6号溝状遺構出土遺物実測図 (1/3)	12
第9図 1号周溝状遺構実測図 (1/50)	14
第10図 1号周溝状遺構出土遺物 (1/4)	15
第11図 2号周溝状遺構実測図 (1/50)	16
第12図 上坑・ピット・一括・試掘出土遺物実測図 (1/3)	18
第13図 挖立柱建物実測図 (1/80)	19

# 表目次

第1表 出土土器観察表1	23
第2表 出土土器観察表2	24
第3表 出土土器観察表3	25

## 図 版 目 次

図版 1	黒太郎遺跡全景	27
図版 2	1号周溝状遺構・2号溝状遺構検出状況	27
図版 3	3号溝状遺構検出状況及び遺物出土状況	27
図版 4	3号溝状遺構遺物出土状況・1	27
図版 5	3号溝状遺構遺物出土状況・2	28
図版 6	3号溝状遺構遺物出土状況・3	28
図版 7	4号溝状遺構遺物出土状況	28
図版 8	6号溝状遺構遺物出土状況	29
図版 9	1号周溝状遺構完掘状況	29
図版 10	1号周溝状遺構遺物出土状況	29
図版 11	1号周溝状遺構石包丁出土状況	30
図版 12	2号周溝状遺構完掘状況	30
図版 13	黒太郎遺跡完掘状況・1	30
図版 14	黒太郎遺跡完掘状況・2	31
図版 15	黒太郎遺跡完掘状況・3	31
図版 16	黒太郎遺跡完掘状況・4	31
図版 17	出土遺物(1)	32
図版 18	出土遺物(2)	33

# 第1章 はじめに

## 第1節 調査に至る経緯

平成10年3月30日、株式会社[ ]より、携帯電話の電波基地局建設のため、宮崎市南方町1007番地における埋蔵文化財の有無の照会が、宮崎市文化振興課に提出された。

文化振興課では、開発予定地には弥生時代～中世にかけての水田遺構およびそれに伴う溝状遺構が存在する可能があることから、試掘の必要性を関係者に説明し、平成10年9月10日に試掘調査を行った。その結果、現地表面下約1mの黄灰色上層より、多量の弥生時代の上器片が出土したため、開発に先立ち発掘調査が必要である旨を伝えた。

その後、エヌ・ティ・ティ九州移動通信網株式会社の委託を受け、開発対象面積825m<sup>2</sup>のうち511.75m<sup>2</sup>について、発掘調査を行った。なお、調査期間は平成10年9月28日から11月14日までである。

## 第2節 遺跡の立地と歴史的環境

黒太郎遺跡は、宮崎市の北部、南方町の水田地帯のほぼ中央に存在する。この一帯は、北は垂水台地から東へ延びる丘陵地に、西は池内から続く下北方丘陵に開まれ、垂水台地から流れ下りた新別府川が池内地区の山間部を抜け、東に流れを変えた部分に広がるほぼ平坦な沖積地である。

この近辺での発掘調査事例はまだないが、北西約3kmの垂水台地には、ナイフ形石器、角錐状石器など旧石器時代の遺物が出土した金剛寺原第1・第2遺跡、縄文時代早期の伊屋ヶ谷遺跡、小原山第1・第2遺跡が存在する。また、黒太郎遺跡から西へ2.5kmの上北方低地の西の丘陵の南端部には、浜田耕作らによって調査され、縄文時代早期の柏田式（塞ノ神式）土器が出土した柏田貝塚が所在する。柏田貝塚から更に南西1.8kmの所には、同時期の跡江貝塚が存在する。

黒太郎遺跡から南へ1.6～2km、下北方丘陵の東南部には、垣下遺跡、宮崎大学茶園遺跡、大宮中学校校庭遺跡、下郷遺跡が存在する。垣下遺跡では竹製の釜や木製の鉢・炭化米の付着した土器片などが出土している。宮崎大学茶園遺跡は未調査のため詳細は不明だが、縄文時代後期と弥生時代中期の土器片が表面採集されている。

下郷遺跡は市内で初めて本格的に調査された環濠集落である。環濠は弥生時代前期後葉～中期前葉に掘り込まれた内環濠と弥生時代中期～後期初頭に掘り込まれた外環濠の2つが検出され、環濠によって強固に防衛された集落からは、住居址22軒、竪穴状遺構25基、貯蔵穴22基、上坑31基が検出されている。各遺構から出土した多量の上器は集落の繁栄を窺わせ、それらの土器の中でも、鳥や魚を描いたと見られる絵画土器は、特筆すべきものであろう。同じく環濠集落が見つかった大淀川の対岸、生日古墳群のある跡江台地上に立地する石ノ迫第2遺跡とともに注目を集めるものである。

下北方丘陵は古墳の密集地としても知られる。丘陵南端部には下北方古墳群があり、前方後

円墳4基、円墳12基、地下式横穴墓9基で構成される。昭和50年に宮崎市教育委員会によって調査された下北方地下式横穴第5号からは、金製垂飾付耳飾や玉類、武具、馬具、鏡など豊富な副葬品が出土し、築造年代は5世紀後半とされている。下北方古墳群南東部、宮崎神宮内には、全長76.8mの前方後円墳、船塚古墳が存在し、墳形から5世紀後半～6世紀前半の築造と思われる。丘陵の中央部、平和が丘団地の辺りには、30基の横穴が確認された池内横穴群があるが、団地の造成に伴い現在は4基が残るのみである。また、上北方低地から立ち上がる丘陵斜面には、上北方横穴群が存在する。表面採集資料のみであるが、須恵器・土師器の坏類や、金箔の耳環がある。さらに跡江台地には、国指定史跡生日古墳群が所在する。古墳時代前期～後期にかけて築造された前方後円墳7基と円墳15基が現存し、現在史跡公園としての整備に向け、宮崎市教育委員会が調査を行っている。

平安時代になると、黒太郎遺跡一帯は豊前宇佐宮領宮崎荘の一部となり、弘長元（1261）年の史料には「宮崎庄内南方奈占名」として登場する。

南北朝時代になると、跡江台地上、石ノ迫第2遺跡の南東には跡江城が築かれる。跡江城は建武3（1336）年、瓜生野八郎左衛門が南朝に応じてこの城に挾り挙兵するが、北朝方の伊東祐持や土持宣宗に攻められ落城した。その後は文献から姿を消すが、名残として現在でも跡江地名には「城ノ下」という地名が残る。

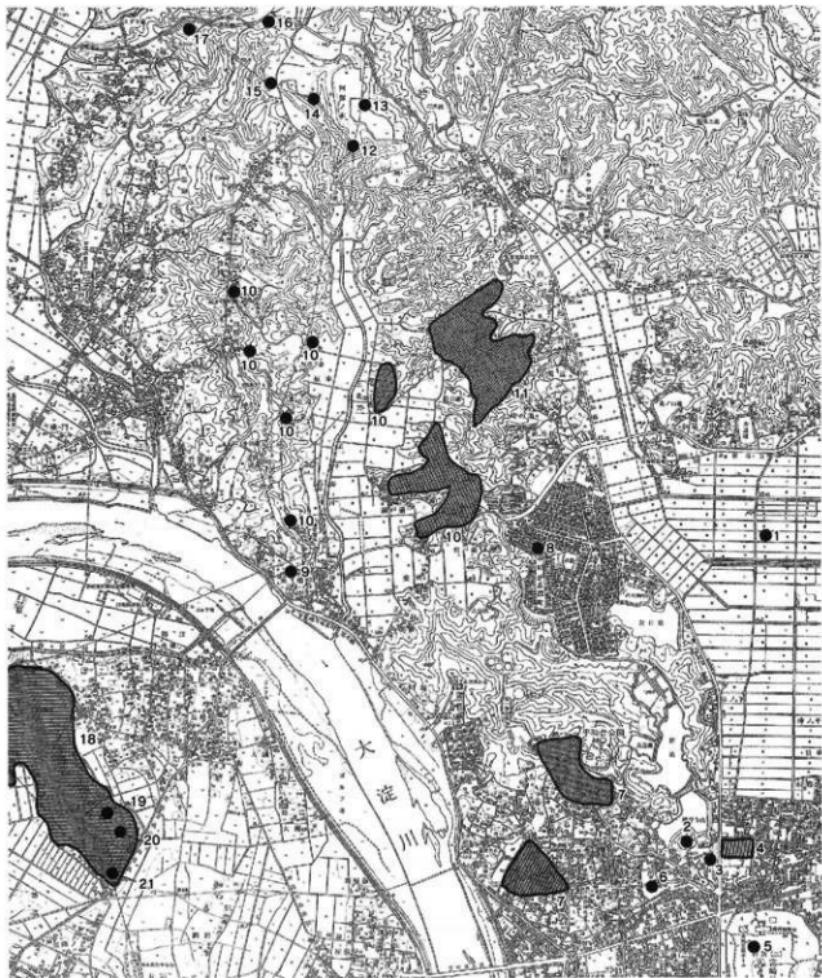
また同じ頃、下北方丘陵上には宮崎城が築かれ、南朝方の武将岡師六郎入道慈円がこの城に投って挙兵したが、やはり上持氏に攻められて落城する。室町時代に入ると、日向は伊東氏・島津氏の攻防の舞台となり、宮崎城は伊東方の城として継続した。天文6（1537）年には伊東義祐が佐土原城から移住し一時居城とするなど、宮崎城は伊東四十八城の一つとして、伊東氏最盛期の重要な拠点となった。伊東氏衰退後は、島津家の家老上井覺兼の居城となつたが、豊臣秀吉の九州征伐に伴い、延岡藩高橋氏に帰属した。高橋氏改易後は次の藩主有馬氏へと引き継がれ、元和元（1615）年の一国一城令により宮崎城は廃城となった。

#### ＜参考文献＞

- 児玉幸多監修『日本城郭大系16～大分・宮崎・愛媛～』新人物往来社 1980
- 『下北方地下式横穴墓第5号』宮崎市教育委員会 1977
- 『金剛寺原第1遺跡・金剛寺原第2遺跡』宮崎市教育委員会 1990
- 『垣下遺跡』宮崎市教育委員会 1991
- 『垂水第1遺跡』宮崎市教育委員会 1994
- 『伊屋ヶ谷遺跡・小原山第1遺跡・小原山第2遺跡・金剛寺原第2遺跡・阿部ノ木遺跡』宮崎市教育委員会 1995
- 『下郷遺跡』宮崎市教育委員会 1999
- 『石ノ迫第2遺跡』宮崎市教育委員会 1999
- 『池内横穴群』『上北方横穴群』『船塚古墳』『宮崎県史 史料編 考古2』宮崎県史刊行会 1993
- 『角川日本地名大辞典 45 宮崎県』 角川書店 1986

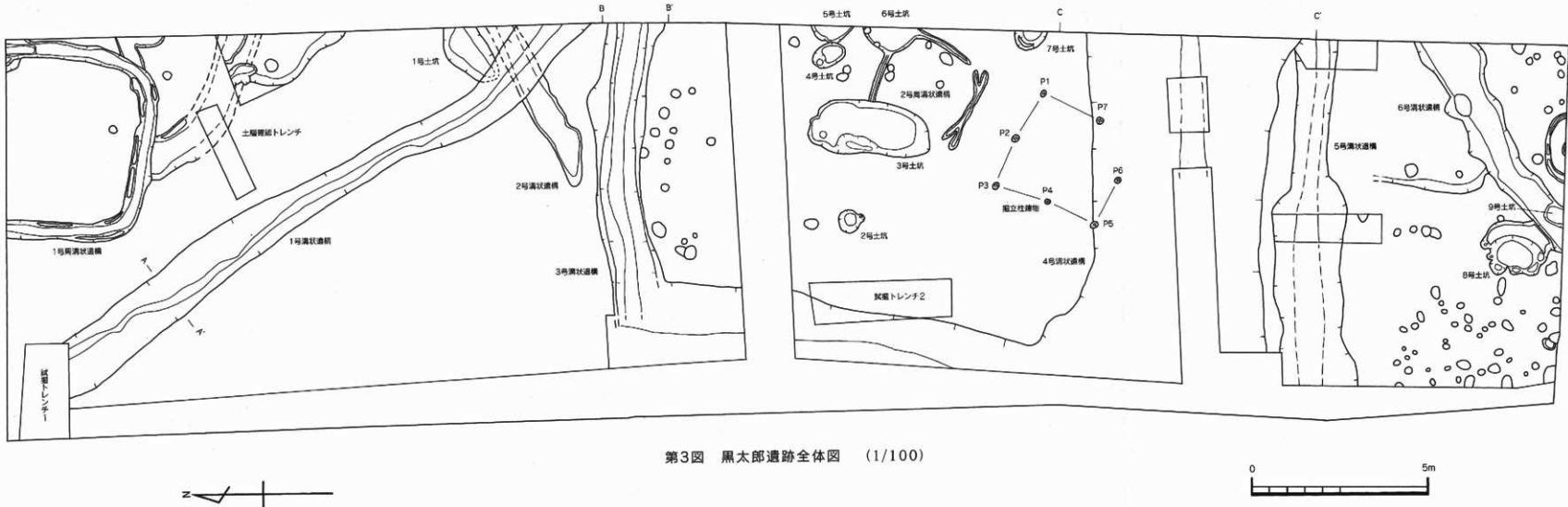


第1図 黒太郎遺跡位置図 (1/50,000)

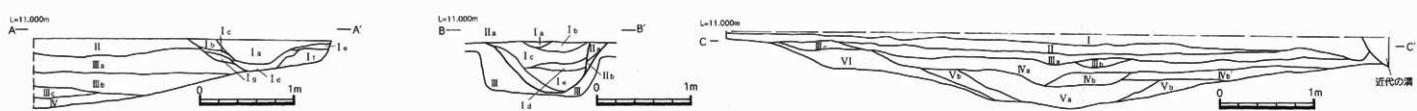


1. 黒太郎遺跡
2. 下郷遺跡
3. 宮大茶園遺跡
4. 埼下遺跡
5. 船塚古墳
6. 大宮中学校校庭遺跡
7. 下北方古墳群
8. 池内横穴
9. 柏田貝塚
10. 上北方横穴群
11. 宮崎城
12. 伊屋ヶ谷遺跡
13. 阿部ノ木遺跡
14. 小原山第1遺跡
15. 小原山第2遺跡
16. 金剛寺原第1遺跡
17. 金剛寺原第2遺跡
18. 生目古墳群
19. 石ノ迫第2遺跡
20. 跡江城
21. 跡江貝塚

第2図 黒太郎遺跡周辺図 (1/25,000)



第3図 黒太郎遺跡全体図 (1/100)



Ia:灰褐色土。橙色と茶褐色の鉄分を含む。  
Ib:灰褐色土。la層に比べ、橙色の鉄分が少なく、茶褐色の鉄分をかなり多く含む。  
Ic:灰褐色土。la層に比べ、砂質が強い。  
Id:灰褐色土。la層に比べ、橙色・茶褐色の鉄分が減少する。  
Ie:灰褐色土。la層+灰白色粘質土のブロック。  
If:灰褐色土。la層に比べ、鉄分が少なく、砂質が強い。  
Ig:灰褐色土。I层とII層の漸移層。  
Ii:黄色土。灰白色を基本とする粘質土で、橙色の鉄分を全体的に含む。  
Iii:灰白色土。茶褐色の鉄分を縦に筋状に含む。  
Iv:灰白色土。IIIa層に比べ、鉄分の含有量が多くなる。  
Iv:灰白色土。IIIb層に比べ、鉄分の含有量が更に増加する。  
N:オリーブ色土。砂質が強く、しまりがない。

Ia:暗褐色土。橙色の鉄分をかなり多く含む。  
Ib:暗褐色土。a層に比べ、鉄分が筋状に入る。往0.5~1mmの炭化物を含む。  
Ic:暗褐色土。Ib層に茶褐色の鉄分を含む。  
Id:暗褐色土。Ia-Ib層に比べ、鉄分の含有量が減少し、色が濃くなる。  
Ie:暗褐色土。Id層よりも鉄分の含有量が減少し、炭化物の量が若干増加する。  
Ii:灰褐色土。Ic層に似ているが、しまり・粘性ともに強い。  
Iib:灰褐色土。Ia層に比べ、鉄分の含有量が減少する。  
III:灰褐色土。II層よりも明るく、粘土と鉄分を含む。

I : 黄色土。砂質が強く、白色のバミスを含む。  
II : 灰色土。橙色、茶褐色の鉄分を含む。  
IIIa:暗褐色土。II層よりも鉄分の含有量が増加する。  
IIIb:暗褐色土。IIIaよりも色が淡く、橙色の鉄分が増加する。  
IIIc:暗褐色土。IIIaよりも茶褐色の鉄分が増加する。  
IVa:暗褐色土。橙色の鉄分が増加する。  
IVb:暗褐色土。Va層よりも橙色の鉄分が減少する。  
IVb:暗褐色土。Vb層よりも色が濃い。  
Va:黑褐色土。Vb層よりも鉄分が減少する。  
Vb:黑褐色土。Vaの層よりも色が薄い。  
VI:灰色土。II層よりも茶褐色の鉄分がかなり増加する。

第4図 黒太郎遺跡土層断面図 (1/40)

## 第2章 調査の成果

### 第1節 調査の概要

黒太郎遺跡は、調査前は周囲を水田とビニールハウスに囲まれる荒蕪地であった。平成10年9月10日に行った試掘調査の結果、昭和30年代前半に行われた耕地整理のため、表土以下約1mは客土であったが、客土の下で弥生時代の遺構及び遺物を検出した。

調査は周囲の高さよりも約1m下がった状態で行われたため、水はけが悪く、大雨の後は遺跡全体が水没してしまい、溜まった水の汲み出しに1日かかるような状況であった。しかも土の粘性が強いため、雨天後は足を取られて作業がしづらく、晴天が続くと上が硬化してしまうという悪条件により、作業が思うように進まなかった為、予定よりも遅れがちになってしまった。

調査の結果、溝状遺構6条、周溝状遺構2条、土坑9基、ピット84基が検出された。84基のピットのうち、調査区中央やや南寄りで検出された7基については、もとは8基のピットで構成される掘立柱建物だと思われるが、8基目のピットは現場において確認できなかった。また、それ以外のピットで規則性は見られなかった。

本遺跡の基本層序は、I層—表土（現代の耕作土）・II層—昭和30年代前半の耕地整理による客土・III層—砂質の強い黄色土層・IV層—砂質が強く、バミスを含む黄色土層・V層—粘性の強い灰色土層・VI層—粘性の強い黄灰色土層・VII層—粘性の強い青灰色土層であり、遺構及び遺物の検出はVI層で行った。

## 第2節 遺構及び遺物について

### 1・溝状遺構について

#### 1号溝状遺構（第3図）

調査区の北西隅から、南東方向にのびる溝で、幅約0.8~1.4m、深さ約15~24cmを測る。断面は逆台形を呈しているが、東に向かって傾斜しているようである。

遺物は底面より5~25cm浮いた状態で出土しているが、量は多くなく、ほとんどが小片となつた状態で出土した。

#### 【出土遺物】（第5図）

1・2は壺の底部で、ともに半底を呈する。3はミニチュアの甕である。いずれも底面よりもやや浮いた状態で出土した。

#### 2号溝状遺構（第3図）

調査区東壁から西に向かってのびる溝だが、1号溝状遺構に切られている上、遺構のほとんどが調査区外にかかるため、遺構の正確な規模は不明である。幅約0.7~0.9m、深さ約9cmを測り、断面は逆台形を呈する。

遺物は底面から若干浮いた状態で検出されたものの、量は少なく、ほとんどが破片となつた状態であったため、図示できるものはなかった。

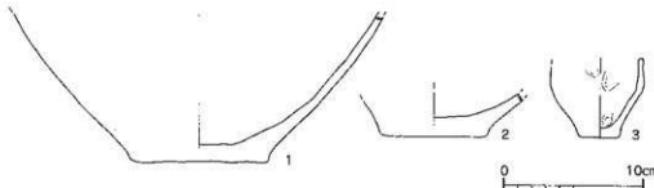
#### 3号溝状遺構（第3図）

調査区を東から西へのびる溝で、幅約1.2~1.6m、深さ約55cmを測る。断面はU字形を呈するが、底面は南に向かってわずかに傾斜しているようである。遺物は主にIa~Ie層で検出され、II層から出土した遺物の量は極めて少ないという状況と、土の堆積状況から、掘り変えられているものと思われる。（第4図参照）。

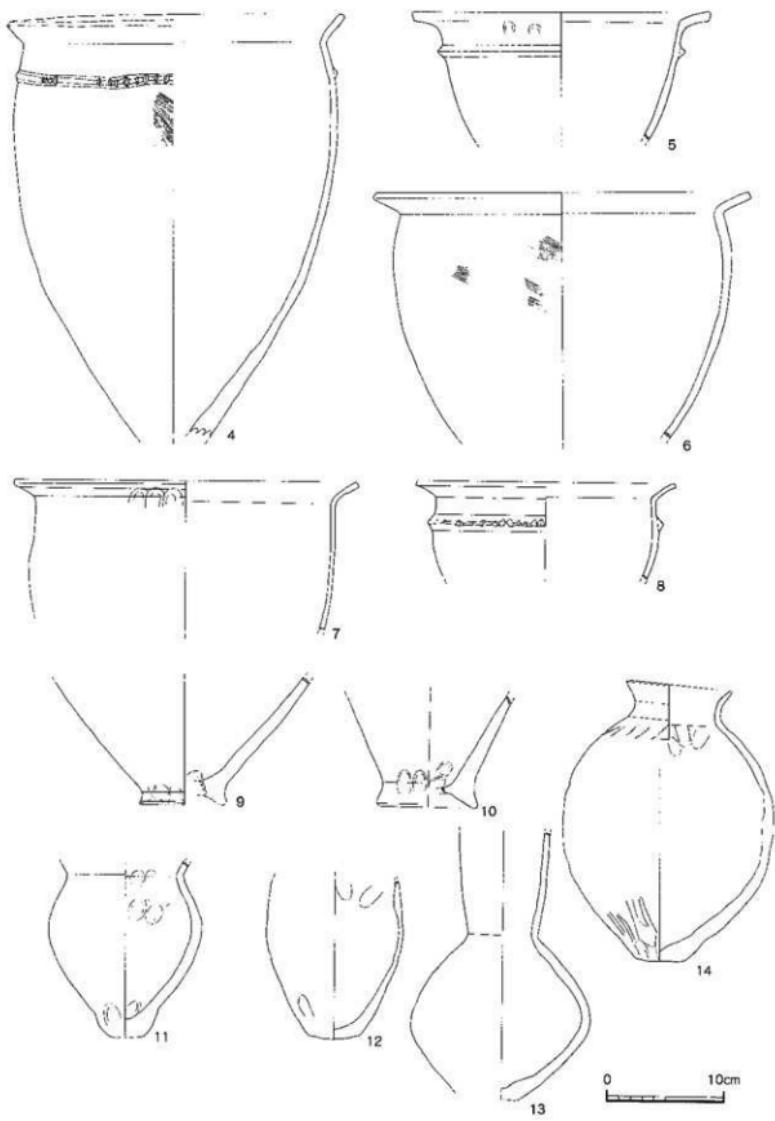
遺物は遺構確認面から底面にわたり、長頸壺をはじめ、壺・甕が大量に検出された。

#### 【出土遺物】（第6・7図）

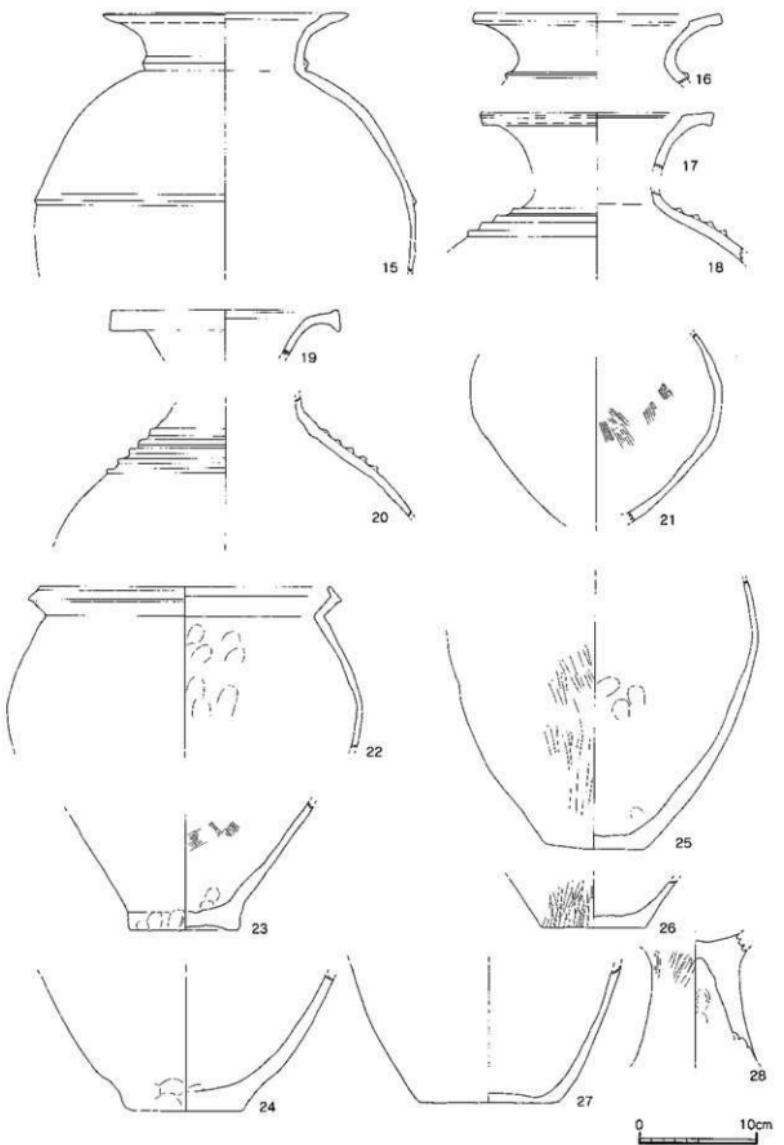
4~10は最大径を口縁部に持つ甕である。4は口縁部が「く」の次に外反し、頸部直下に刻目突帯を持つ。胴部上位が張る。5は口縁部が倒L字形に近い形で外反し、頸部直下に突帯を持つ。胴部の張りは小さい。6・7は口縁部が「く」の字に外反し、8は倒L字形気味に強く



第5図 1号溝状遺構出土遺物実測図 (1/3)



第6図 3号溝状造構出土遺物実測図・1 (1/4)



第7図 3号溝状遺構出土遺物実測図・2 (1/4)

外反する。7・8は胴部上位が膨らんだ後、頸部から口縁部に向かってほぼ垂直にのびる。8は頸部直下に刻目突帯を持つ。9・10は底部で、上げ底を呈する。11～26は壺である。11・12はともに長胴の壺である。11は口縁部を欠くが、口縁部が短く外反し、最大径は胴部中位よりやや上にくると思われる。13は長頸壺で、胴部は緩やかに「く」の字に張り、頸部から口縁部に向かって若干開く。「免田系」か。14は最大径を胴部中位に持つ長胴の壺で、口縁部は短く「く」の字に外反する。肩部に沈線を施す。「瀬戸内系」か。15～17はいわゆる錐先口縁で、15は口縁部が緩やかに外反し、胴部中位に最大径を持つ。頸部直下と胴部中位に突帯を持つ。16は口縁部が強く外反し、頸部直下に突帯を持つ。17は口縁部が緩く外反する。18は4条の突帯を持つ胴部である。接点はないが、17・18は同一個体であると思われる。19は頸部から口縁部に向かって倒L字形気味に強く外反する。20は胴部で、上位に5条の突帯を持つ。接点はないが、19・20は同一個体であると思われる。22は複合口縁壺で、口縁部は「く」の字に強く外反し、口縁部上半が短く内傾する。胴部中位に最大径を持つ。23は底部で、やや上げ底を呈する。22・23は接点はないが、同一個体であると思われる。24～26は平底を呈する。27は鉢で、口縁部に向かって緩やかに立ち上がる。28は高壺の脚部で透かしを持たず、脚部は緩やかに「ハ」の字に外反する。

#### 4号溝状遺構（第3図）

調査区を東から西へとび、調査区西壁手前で約70度の角度をもって調査区北東隅に向かってのびる溝である。3号溝状遺構との合流点で切り合うが、先後関係は確認できなかった。幅約4.8～6.0mの大型の溝状遺構で、深さは約70cmを測る。

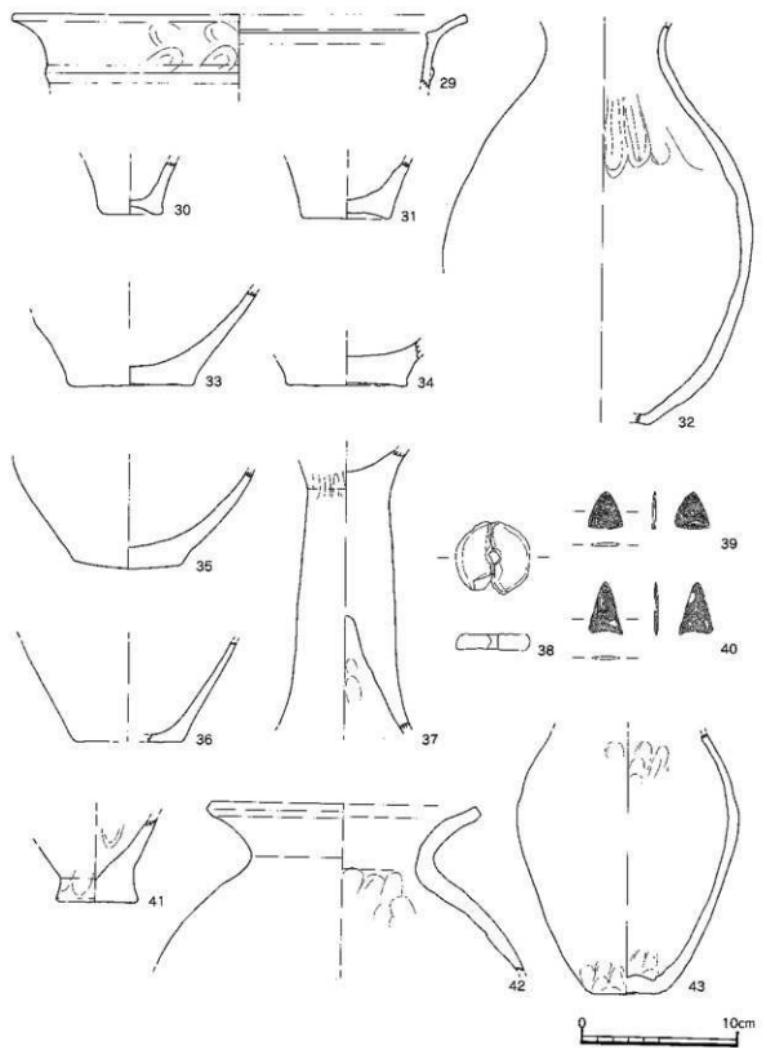
遺物は東西方向にのびる方で多量に検出され、北東方向へ曲がってからの遺物の量は少なかった。また、東西方向にのびる方においても、底面から約15～60cm浮いた状態で多量に確認されているものの、底面に近くなるほど減少したことから、ほとんどの遺物は流れ込みの可能性が高い。甕・壺・高壺の脚部・紡錘車・磨製石器が出土している。

#### 【出土遺物】（第8図）

29は壺である。頸部と口縁内部に突帯を持つ。30・31は甕で、やや上げ底を呈し、緩やかに外反して立ち上がる。32～35は壺である。32は胴部中位に最大径を持ち、口縁部は緩やかに外反する。球形の胴部を呈する。33・34はわずかに上げ底を呈する。35は平底である。36は平底の鉢である。37は高壺の脚部で、脚部と壺部が緩やかに外反する他は、ほぼ垂直に立ち上がる。38は紡錘車である。十製で、胎上には雲母と砂粒を多く含む。ほぼ完形で、直径4.8cm、厚さ1.1cm、孔径0.8cm、重量23.5gを測る。39・40は磨製石器である。39が平基式の磨製石器で粘板岩製、40が凹基式の磨製石器で頁岩製である。いずれの遺物も底面から30～60cm浮いた状態で出土した。

#### 5号溝状遺構（第3図）

調査区南寄りで検出された、東西方向へのびる溝で、幅約1.0～2.0m、深さ約18～50cmを測



第8図 4号溝状造構・6号溝状造構出土遺物実測図 (1/3)

る。断面はU字形を呈するが、底面は若干南に向かって傾斜する。調査は埋上と深さを確認するため、溝を截ち割る形でトレーナーを2本入れたところだが、調査区西壁際に入れたトレーナーで確認した溝底よりも、そこから約4.2m西に入れたトレーナーで確認された溝底の方が若干深いことから、溝は東から西へ向かって流れているものと考えられる。埋土が青色粘土層であり、他の遺構と全く異なること、同じく青色粘土上を埋土とするピットがほぼ等間隔に並んでいること、木製の杭のようなものが打たれたままの状態で見つかったことなどから、近代以降の溝であると思われる。遺物は出土していない。

#### 6号溝状遺構（第3図）

調査区東壁から南西方向に向かってのびる溝である。幅約1.0~1.7m、深さ約6cmを測る。8号上坑と切り合っているほか、ピットに切られている。

遺物は弥生土器の小片が、底からやや浮いた状態で多量に出土しているが、接合可能であったものは非常に少なかった。

#### 【出土遺物】（第8図）

41は甕である。充実した底部を呈し、底部から胴部に向かって緩やかに外反する。42・43は壺である。42は胴部中位に最大径を持ち、口縁部は「く」の字に強く外反する。43は胴部中位よりやや上に最大径を持ち、口縁部が短く外反する長胴の壺だと思われる。

### 2・周溝状遺構について

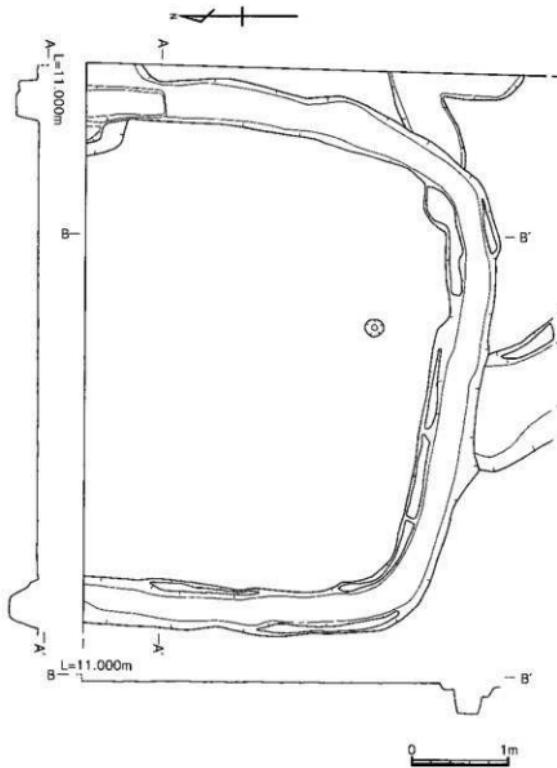
#### 1号周溝状遺構（第9図）

調査区北壁で検出されたものである。遺構の半分近くが調査区外にかかり、正確な規模は不明であるが、隅丸方形のプランを呈するものだと想われる。深さは20~40cmを測る。ところどころに残るテラスなどから、掘り変えられている可能性がある。

遺物は底面から約5~20cm浮いた状態で高壺の脚部や甕・壺・石包丁が出土しており、底面からは甕・壺が出土している。

#### 【出土遺物】（第10図）

44~49は甕である。44・45は口縁部が緩やかに外反し、胴部直下に突帯を持つ。44は胴部上位に最大径を持つ。46は底部の一部を欠くが、やや上げ底を呈すると思われる。47は球形を呈する胴部、48は底部である。49は上げ底を呈する。50は平底の壺である。51は脚台付鉢で、脚部は「ハ」の字に大きく開き、口縁部は倒L字形に外反する。52は高壺の脚部で、緩やかに「ハ」の字に開き、端部が若干上方に立ち上がる。54は頁岩製の石包丁で、出土時にわずかに刃部を欠いたが、完形である。1号周溝状遺構検出時に出土したもので、底部から約20cm浮いた状態で出土した。6つの穿孔が見られるが、組擦れの痕のようなものが見られるのは1つだけで、残りの5つの穴については用途不明と言わざるを得ない。単なる装飾、もしくは五穀豊穣といった、祭祀的要素を含む可能性もある。



第9図 1号周溝状造構実測図 (1/50)

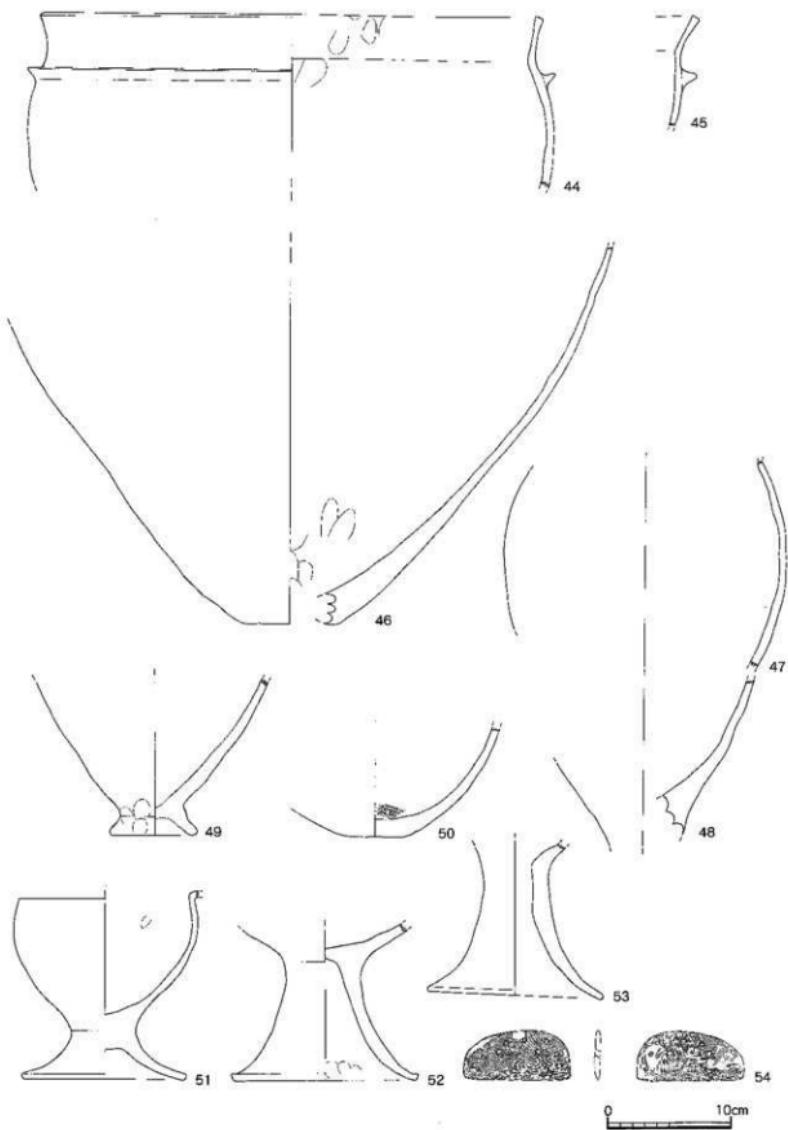
### 2号周溝状造構（第11図）

調査区ほぼ中央東寄りで検出された。3号上坑及び6号上坑と切り合う。溝幅約20cm、深さ約6~14cmを測り、平面形は $2.7\text{m} \times 2.2\text{m}$ の方形を呈する。遺物は埋土中から、弥生土器の破片がわずかに出土しているのみである。

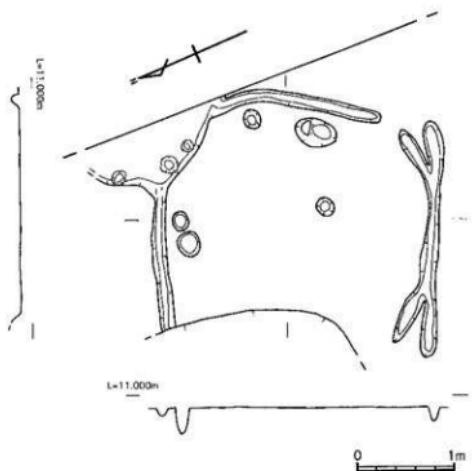
### 3・土坑について

#### 1号土坑（第3図）

調査区北側の東壁で検出された。遺構の一部が調査区外にかかり、1号溝状造構に切られている。 $2.1\text{m} \times 1.2\text{m}$ の長楕円形の平面を呈し、深さは約24cmを測る。



第10図 1号周溝状遺構出土遺物 (1/4)



第11図 2号周溝状造構実測図 (1/50)

遺物は床面からわずかに浮いた状態で壺の底部が出土したほか、埋土中から弥生土器の小片が出土している。

#### 【出土遺物】(第4図)

55は平底を有する壺の底部である。

#### 2号土坑 (第3図)

調査区ほぼ中央西寄りで検出された。径約0.6mの円形を呈し、深さは約7cmを測る。ピット1基と切り合う。遺物は埋土中から、弥生土器の破片がわずかに出土したのみである。

#### 3号土坑 (第3図)

調査区ほぼ中央東寄りで検出された。3.5m×1.5mの長楕円形のプランを呈し、深さは約18cmを測る。遺構の西側で更に約6cm下がるため、他の遺構との切り合いも考えられるが、現場においては確認できなかった。

遺物は埋土中から、弥生土器の小片が出土したほか、底面からやや浮いた状態で敲石・凹石が、底面直上で弥生土器がわずかに出土している。

#### 【出土遺物】(第14図)

56は敲石、57は凹石である。ともに砂岩製で、底面から25cmほど浮いた状態で出土した。

#### 4号土坑 (第3図)

3号土坑の東側で確認され、5号上坑を切る。1.0m×0.6mの長楕円形のプランを呈し、深さは約9cmを測る。遺物は出土していない。

#### 5号土坑 (第3図)

4号土坑の東側で確認された。4号土坑に切られている。遺構の半分近くが調査区外にかかるため、遺構の正確な規模は不明だが、1.2m×0.5mの長楕円形のプランを呈するものと思われる。深さは約11cmを測る。遺物は出土していない。

### 6号土坑（第3図）

5号土坑の南側で検出された。2号周溝状遺構と切り合うが、先後関係は確認できなかった。遺構の一部が調査区外にかかるため、遺構の正確な規模は不明だが、径1.5mの円形か、1.5m×0.8m以上の長楕円形のプランを呈するものと思われる。深さは4cmを測る。ピット6基と切り合うが、遺構との関係は不明である。遺物は弥生土器の破片が、埋上中からわずかに出土しているだけである。

### 7号土坑（第3図）

6号土坑の南側で検出された。遺構の一部が調査区内にかかるため、遺構の正確な規模は不明だが、径約0.5mの円形か、0.5m×0.6m以上の長楕円形のプランを呈するものと思われる。深さは約20cmを測る。遺物は埋土中から、弥生土器の小片がわずかに出土したのみである。

### 8号土坑（第3図）

調査区南で検出された。6号溝状遺構と切り合うが、先後関係は確認できなかった。1.8m×1.7m以上の不定形のプランを呈する。深さは12cmを測る。ピット7基と切り合うが、遺構との関係及び先後関係は確認できなかった。

遺物は底面からやや浮いた状態で弥生土器片が出土しているが、そのほとんどが小片の状態で出土し、接合も難しい状態であった。

### 【出土遺物】（第14図）

58は平底の壺の底部である。59は口唇部とその直下に突帯をもつ壺である。60・61は器台で、接点はないが同一個体であると思われる。60は「ハ」の字に大きく開く口縁部である。61は透しを持つ裾部で、上段に1つ、下段に3つが現存する。62は打製石鎌である。

### 9号土坑（第3図）

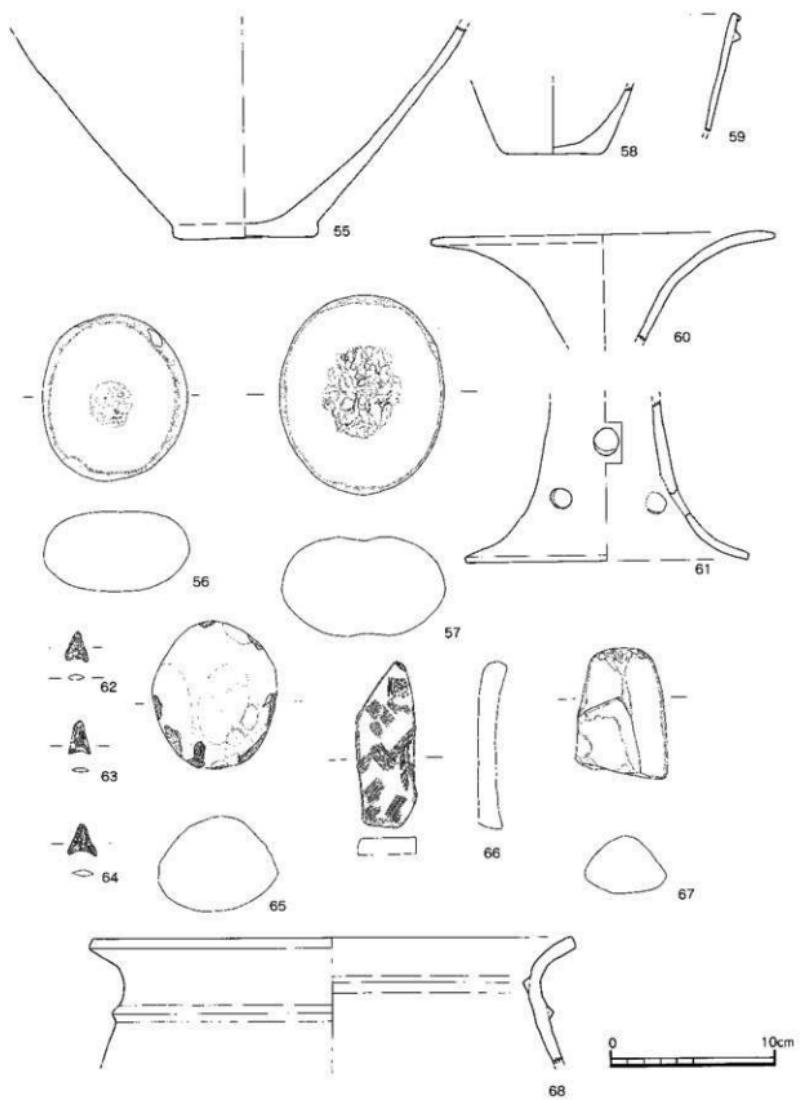
調査区南、6号溝状遺構調査中に検出された。遺構の南側が調査区外にかかるため、遺構の正確な規模は分からぬが、0.6m×0.5m以上の長楕円形のプランを呈するものと思われる。深さは約11cmを測る。

遺物は底面直上で弥生土器の小片がわずかに出土したのみで、図示できるものはなかった。

## 4・その他の遺構・遺物について（第3図）

### ピット

ピットは調査区全体で84基が検出されたが、後述する掘立柱建物と思われる7基以外には、規則性が見られなかった。また、P8（径40cm、深さ約41cm）から貞岩製の磨製石鎌（63）と弥生土器の破片が出土したほかは、7基のピットで弥生土器の碎片がわずかに出土しただけである。



第12図 土坑・ピット・一括・試掘出土遺物実測図 (1/3)

### 掘立柱建物（第13図）

調査区中央よりやや南寄り、4号溝状遺構にわずかにかかる状況で検出された。南東隅の柱穴を欠くが、もとは2間(3.05m)×2間(2.75m)の掘立柱建物であったと推測される。柱穴は径13~20cm、深さは7.4~27.6cmを測る。柱穴内からは遺物は出土していない。

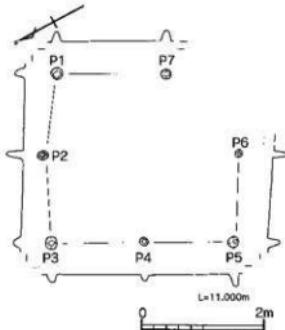
### 一括遺物（第12図）

64は安山岩製の打製石鎌である。65は頁岩製の敲石である。調査区中央を精査中に出土したものである。66は砂岩製の砥石である。67は砂岩製の敲石である。

第13図 掘立柱建物実測図  
(1/80)

### 試掘調査出土遺物（第12図）

平成10年9月10日に行った試掘調査の際、調査区北東隅の試掘トレーニチから出土したものである。68は壺の口縁部で、頸部と口縁部内面に突帯を持ち、口縁部は緩やかに外反する。



## 第3章 まとめ

黒太郎遺跡の調査では、溝状遺構6条、周溝状遺構2条、土坑9基、ピット84基、擧立柱建物が1軒と多量の弥生土器が検出された。遺物は石川悦雄氏の編年（註1）によって3時期に分類される。

### 1期

口縁部直下と口縁部内面に突帯を持つ壺（29, 68）

### 2期

甕・・・鋸先口縁を呈するもの（15～17, 19）

壺・・・最大径を口縁部に持ち、胴が張り、突帯を持つもの（4, 8）、胴が張らず突帯を持つものの（5）、突帯を持たないもの（7）

### 3期

甕・・・最大径を口縁部に持ち、口縁部が緩く外反し、直下に突帯を持つもの（44, 45）

壺・・・平底を呈し、胴部が丸く張る免田系の長頸壺の様相を呈するが、免田系の特徴である平行沈線文、重弧文を施さないもの（13）

胴部中位に最大径を持ち、口縁部が短く外反するもの（11, 14）

胴部中位に最大径を持ち、口縁部が「く」の字に強く外反するもの（22, 42）

球形の胴部を持ち、平底を呈するもの（32）

鉢・・・「ハ」の字に開く脚台を持ち、口縁部が倒L字形に強く外反するもの（51）

高坏・・・脚部が「ハ」の字に外反し、端部が上方に立ち上がるもの（52）

脚部が「ハ」の字に外反するもの（53）

器台・・・体部が細く、口縁部・擧部とともに大きく外反するもの（60, 61）

1期は石川編年のI c期（弥生時代前期末葉）に相当する。この時期の遺物はわずかに2点にとどまる。68は試掘調査の際、試掘トレンチ1から出土したもので、今回の調査区外からの出土の可能性もあり、遺構も不明である。29は4号溝状遺構からの出土であるが、底面からかなり浮いた状態での出土であったため、流れ込みの可能性が高い。そのため、この時期に相当する遺構は今回の調査では確認されなかった。

2期の遺物は、石川編年IV期（弥生時代中期末～後期初頭）に相当する。この時期に相当する遺構は3号溝状遺構である。3号溝状遺構からは、後述する3期の遺物も出土しているが、そのほとんどが底面から浮いた状態での出土であったため、それらは流れ込みであると判断した。

3期の遺物は石川編年のV期（弥生時代後期前葉～後葉）に相当する。この時期に相当する

遺構は1号周溝状遺構である。4号溝状遺構からも、この時期の遺物が出土しているが、底面からかなり浮いた状態での出土であり、遺構の時期を決定する資料とはなり得なかった。

本遺跡の出土遺物は、かなり粘性の強い土から出土しており、遺物の外面・内面ともに、遺物の取り上げ時に剥離してしまうことがほとんどであったため、調整等は不明なものが多かった。また、調査で出土した遺物量に対して、図示できるものが少なかった点においては、同様の風化のため、接合点がなくなってしまったためであると思われる。そのため、時期を明示できる遺構が3号溝状遺構と1号周溝状遺構だけである点は非常に残念である。

黒太郎遺跡周辺は、もともとは現在よりも流れが大きく、蛇行していた大淀川の氾濫原であると考えられていた。しかし、今回の調査によって、大淀川の氾濫原は黒太郎遺跡よりも南に存在し、周辺一帯は微高地であった可能性が高くなった。

また調査中に、近くのビニールハウスで仕事をしている方々から、周辺のビニールハウスを建てる際に土器片が出土したことや、黒太郎遺跡の北西約0.6kmにある奈古神社において、壺のようなものが完形で出土したらしい、というような話を伺うことができた。

また、『日向地誌』の「南方の部」には、「奈古山稜 奈古山ノ絶嶺ニアリ。其形隆然長南北三十間、幅東西六十七間。其南北両辺ハ円ニシテ大ク中央ハ稍低シテ盛マル。恰モ船塚岡ノ形ニ似タリ。疑フヘクモナク往古ノ山稜ニシテ、所謂山岡ノ上ニ因テ円ク築クモノナリ。然レトモ、満山樹木蔽鬱トシテ外ヨリ其地勢ヲ認メ難ケレバ、人皆尋常ノ山トノミ思テ、其山稜タルコトヲ知ル者鮮ナシ。」という記述が見られ、奈古山に前方後円墳が存在したことが書かれている。現状では判断しがたいが、奈古神社に古墳が存在すれば、この近くに古墳を築いた人々の集落が存在する可能性もある。しかし残念ながら、昭和30年代の耕地整理により、弥生時代後期以降の遺構や遺物は検出できなかった。

黒太郎遺跡においては、住居址といった、人々がこの場で生活していた痕跡となるものが検出されなかったが、調査区北壁において1号周溝状遺構が検出されている。周溝状遺構は住居に伴って検出されることが多いことから、調査区の北側には住居址が存在する可能性もある。

最後に、下郷遺跡との関係に触れたい。下郷遺跡は黒太郎遺跡の南1.6kmの所に位置する環濠集落である（註2）。環濠は弥生時代前期後葉～中期前葉に掘り込まれた内環濠と、弥生時代中期末～後期初頭に掘り込まれた外環濠の2つが検出されている。下郷遺跡は4期に分かれ、下郷1・2期が内環濠の時期に、下郷3・4期が外環濠の時期に相当するが、下郷3期が黒太郎遺跡2期、下郷4期が黒太郎遺跡3期に相当する。時期がほぼ一致することから、下郷遺跡と黒太郎遺跡の間には、何らかの関係があったことが窺える。

下郷遺跡においては、下郷4期（黒太郎遺跡3期）に相当する遺構が圧倒的に多く、その時期が下郷遺跡の全盛期であったと推測できるが、黒太郎遺跡においては1号周溝状遺構が同時期に存在する。周溝状遺構は①溝の中に壁を立てる平地式建物、②特定の住居に伴うものではなく、住居群（建物群）に属するものであると考えられている（岡本1998）ことから、黒太郎遺跡も住居址は検出されていないものの、すぐ近くに住居址が存在する可能性は十分に考えられ、今回の調査ではその集落の一部を確認したものと考えられる。

黒太郎遺跡においては、時期を特定できる遺構が2つしかなく、2つとも時期が異なるため、当遺跡の隆盛期を測ることは難しい。しかし、黒太郎遺跡2期に相当する3号溝状遺構からは、底面から浮いた状態で免田系の長顎壺（13）をはじめとして、11・14・22といった3期の遺物が出土している。また、3号溝状遺構のすぐ北側に1号周溝状遺構が存在することから、3号溝状遺構は、3期になると溝としての役割を果たさなくなっていくが、集落そのものは2期で絶えることなく、3期まで存続したものと思われる。

黒太郎遺跡と下郷遺跡は、地理的な距離もさることながら、その時期までもが一致しており、下郷遺跡を拠点とした集団である可能性が高い。出土遺物においても、下郷遺跡と類似するものが少なくなく、交流があったことが窺える。しかし今回の調査のみでは、黒太郎遺跡を含む集落の規模は測りきれず、環濠集落を築いた下郷遺跡の集団の支配下にあったものなのか、友好関係にあった全く別の集団であるかは分からぬ。今後の周辺での調査と資料の増加を待ちたい。

また、下郷遺跡は4期（黒太郎遺跡3期）を最後に、環濠集落の役目を失い、集落は移転もしくは廃絶してしまったと考えられている。黒太郎遺跡においては、昭和30年代前半の耕地整理により、弥生時代後期以降の遺物や遺構は確認できない状態になっており、黒太郎遺跡の人々が下郷遺跡という後ろ盾を失った後も存続したのか、下郷遺跡の終焉とともに、黒太郎遺跡を含む集落も移転もしくは廃絶の道を辿ったのかは分からぬ。

しかし、わずか0.6kmしか離れていない所に古墳があるという伝承が残っていること、平安時代には宇佐宮の莊園として歴史に登場することから、どのような形であるかは分からぬが、古墳時代以降も黒太郎遺跡周辺には絶えず集落が存在したことが推測できる。

最後になりましたが、開発主であるエス・ティ・ティ九州移動通信網株式会社をはじめとする各関係機関の方々、悪天候と悪条件に翻弄されながらも、手に肉刺を作つて一生懸命作業してくださった作業員の皆様、現地での調査および本書の作成にあたり、貴重なご助言をくださいました方々へ、この場を借りて心より感謝申し上げます。

（註1）石川悦雄 「宮崎平野における弥生土器編年試案—素描（M k II）」

『宮崎考古』第9号

（註2）『下郷遺跡』宮崎市教育委員会 1999

#### 【参考文献】

「石ノ迫第2遺跡」宮崎市教育委員会 1999

「中岡遺跡」宮崎市教育委員会 1987

「持田中尾遺跡発掘調査概要報告書」高鍋町教育委員会 1982

「貝元遺跡I・II」福岡県教育委員会 1999

「柳瀬遺跡」下関市教育委員会 1997

岡本淳一郎 「弥生時代周溝遺構に関する一考察」『富山考古学研究』創刊号 1998

工楽善道他編 『日本土器事典』 雄山閣 1996

出土土器観察表 1

遺物 番号	出土遺構	種類 器種	法量(cm)			調 整		色 調		胎 土	備 考
			口径	器高	底径	外 面	内 面	外 面	内 面		
1	1号溝状遺構	壺			10.2	風化著しい	風化著しい	にぶい橙	にぶい黄橙	砂粒、細砂粒を多く含む	
2	〃	壺			7.5	風化著しい	風化著しい	灰白	灰白	砂粒を多く含む	
3	〃	ミニチュア器			2.7	風化著しい	ユビオサエ	にぶい橙	明褐灰	砂粒を多く含む	
4	3号溝状遺構	甕	28.5			ハケ、ナデ	風化著しい	にぶい橙	にぶい橙	砂粒、細砂粒を多く含む	刻目突帯
5	〃	甕	25.6			ユビオサエ	ナデ	にぶい黄橙	浅黄橙	砂粒、細砂粒を多く含む	
6	〃	甕	32.0			ハケ	風化著しい	にぶい橙	灰白	砂粒、細砂粒を多く含む	
7	〃	甕	29.6			ユビオサエ	風化著しい	褐灰	褐灰	砂粒を多く含む	
8	〃	甕	22.5				ナデ	灰褐	にぶい橙	砂粒、細砂粒を多く含む	刻日突帯
9	〃	甕			7.1	風化著しい	風化著しい	橙	にぶい橙	砂粒、砂粒を多く含む	
10	〃	甕			7.3	ユビオサエ	ユビオサエ	にぶい橙	暗灰	砂粒、細砂粒を多く含む	
11	〃	壺			2.8	ユビオサエ	ユビオサエ	橙、褐灰	橙	砂粒、細砂粒を多く含む	
12	〃	壺			4.4	ユビオサエ	ユビオサエ	明褐灰	にぶい橙	砂粒、砂粒を多く含む	
13	〃	長頸壺				風化著しい	風化著しい	赤褐色	にぶい黄橙	砂粒をやや多めに含む	免田系
14	〃	壺	9.0	24.3	4.6	風化著しい	ハケ	灰白	灰白	砂粒をかなり多く含む	新戸内系か?
15	〃	壺	20.5			風化著しい	風化著しい	橙	明褐灰	砂粒、細砂粒を多く含む	貼付突帯
16	〃	壺	21.2			風化著しい	風化著しい	淡黄橙	灰	砂粒を含む	貼付突帯
17	〃	壺	19.8			ミガキ?	ミガキ?	にぶい黄橙	暗灰	砂粒を含む	18と同一個体か?
18	〃	壺				ナデ	ミガキ?	にぶい黄橙	黒	砂粒を含む	貼付突帯
19	〃	壺	19.7			風化著しい	風化著しい	橙	橙	雲母、砂粒を含む	20と同一個体か?
20	〃	壺				風化著しい	風化著しい	橙	橙	雲母、砂粒を含む	貼付突帯
21	〃	壺				風化著しい	ハケ	にぶい橙	褐灰	砂粒、細砂粒を多く含む	スス付着
22	〃	壺	24.8			風化著しい	ユビオサエ	橙	暗灰	砂粒、細砂粒を多く含む	23と同一個体か?
23	〃	壺			9.2	ユビオサエ	ハケ?	にぶい橙	暗灰	砂粒、細砂粒を多く含む	22と同一個体か?
24	〃	壺			9.3	ユビオサエ	ユビオサエ	にぶい黄橙	暗灰	砂粒、細砂粒を多く含む	
25	〃	壺			8.6	ミガキ?	ユビオサエ	橙	褐灰	砂粒、細砂粒を多く含む	
26	〃	壺			9.0	ミガキ	ナデ	にぶい黄橙	黒、灰	細砂粒を多く含む	
27	〃	鉢			12.0	ハケ?	ナデ	灰白	にぶい橙	細砂粒を多く含む	
28	〃	高坏				ミガキ	ユビオサエ	淡黄橙	淡黄橙	砂粒、細砂粒を多く含む	
29	4号溝状遺構	壺	29.5			ユビオサエ	ナデ	にぶい橙	明褐灰	砂粒を多く含む	貼付突帯
30	〃	甕			3.6	風化著しい	ユビオサエ	淡黄橙	淡黄橙	細砂粒を多く含む	

## 出土土器観察表 2

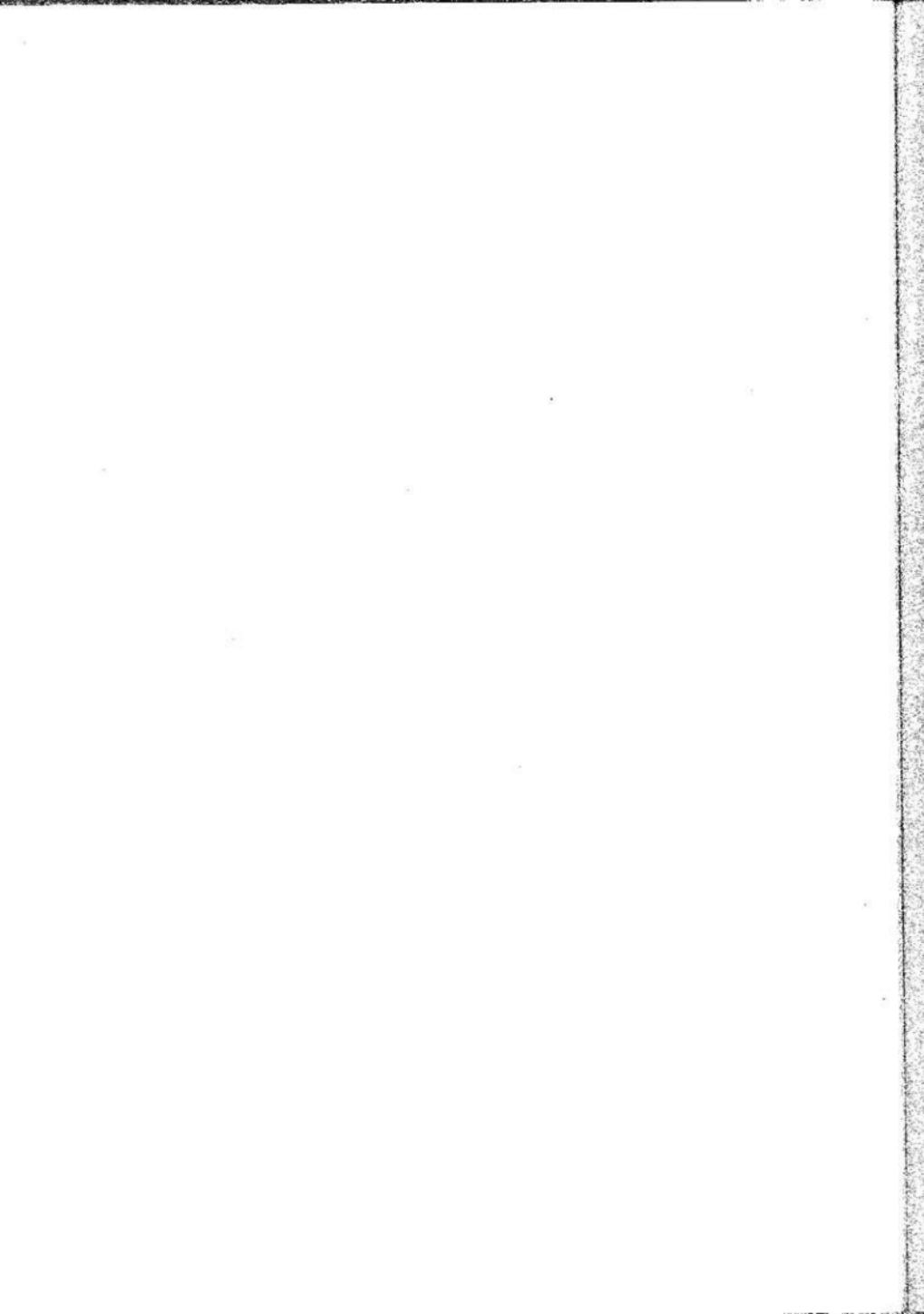
遺物番号	出土遺構	種類器種	法量(cm)		調整		色調		胎土	備考	
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面		
31	4号溝状遺構	甕			5.6	風化著しい	風化著しい	灰白	にぶい橙	砂粒を少し含む	
32	〃	壺				風化著しい	ナデ	淡橙	灰	砂粒を含む	
33	〃	壺			8.0	風化著しい	風化著しい	にぶい橙	灰褐	砂粒をやや多めに含む	
34	〃	壺			7.7	ナデ	ナデ	灰白	灰白	砂粒を多く含む	
35	〃	壺			6.9	風化著しい	風化著しい	橙	橙	雲母、砂粒を多く含む	
36	〃	鉢			7.1	風化著しい	風化著しい	にぶい黄橙	淡黄橙	砂粒、細砂粒を多く含む	スス付着?
37	〃	高環				風化著しい	風化著しい	淡橙	にぶい橙	砂粒、細砂粒を多く含む	
38	〃	軽鍵車								雲母、砂粒を多く含む	(本文参照)
39	〃	(磨製石鎌)									(石器計測表) 参照
40	〃	(磨製石鎌)									(石器計測表) 参照
41	6号溝状遺構	甕			5.0	ユビオサエ	ユビオサエ	褐灰	にぶい赤橙	砂粒、砂粒を含む	
42	〃	壺	17.0			ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	砂粒、細砂粒を多く含む	
43	〃	壺			4.3	ユビオサエ	ユビオサエ	粒	橙	大型の礫を1ヶ含む	
44	1号周溝状遺構	甕	40.5			風化著しい	ユビオサエ	にぶい橙	にぶい橙	礫をかなり多く含む	貼付突帯
45	〃	甕				風化著しい	風化著しい	にぶい橙	褐灰	砂粒、細砂粒を多く含む	貼付突帯
46	〃	甕			8.0	風化著しい	ユビオサエ	にぶい橙	褐灰	礫をかなり多く含む	
47	〃	甕				風化著しい	風化著しい	にぶい橙	灰白	砂粒、細砂粒を多く含む	
48	〃	甕				風化著しい	風化著しい	にぶい黄橙	にぶい黄橙	砂粒、細砂粒を多く含む	
49	〃	甕			6.6	ユビオサエ	風化著しい	にぶい黄橙	灰	細砂粒を多く含む	
50	〃	壺			5.4	風化著しい	ハケ	褐灰	明褐灰	砂粒、砂粒を含む	
51	〃	脚台付鉢			13.1	風化著しい	ユビオサエ	淡黄橙	黑	砂粒、細砂粒を多く含む	
52	〃	高環			14.8	風化著しい	ユビオサエ	淡黄橙	淡黄橙	砂粒を多く含む	
53	〃	器台			14.2	風化著しい	風化著しい	にぶい橙	褐灰	砂粒、細砂粒を多く含む	
54	〃	(右包丁)									(右器計測表) 参照
55	1号上坑	壺			8.1	風化著しい	風化著しい	にぶい赤褐	にぶい赤褐	雲母、砂粒を多く含む	
56	3号土坑	(敲石)									(右器計測表) 参照
57	〃	(圓石)									(右器計測表) 参照
58	8号上坑	壺			5.7	風化著しい	風化著しい	淡黄橙	灰、灰黄	砂粒を多く含む	
59	〃	甕				風化著しい	風化著しい	灰	灰	砂粒、細砂粒を多く含む	貼付突帯
60	〃	器台	21.1			風化著しい	風化著しい	淡黄橙	にぶい橙	砂粒、細砂粒を多く含む	61と同じ 体か

### 出土土器観察表 3

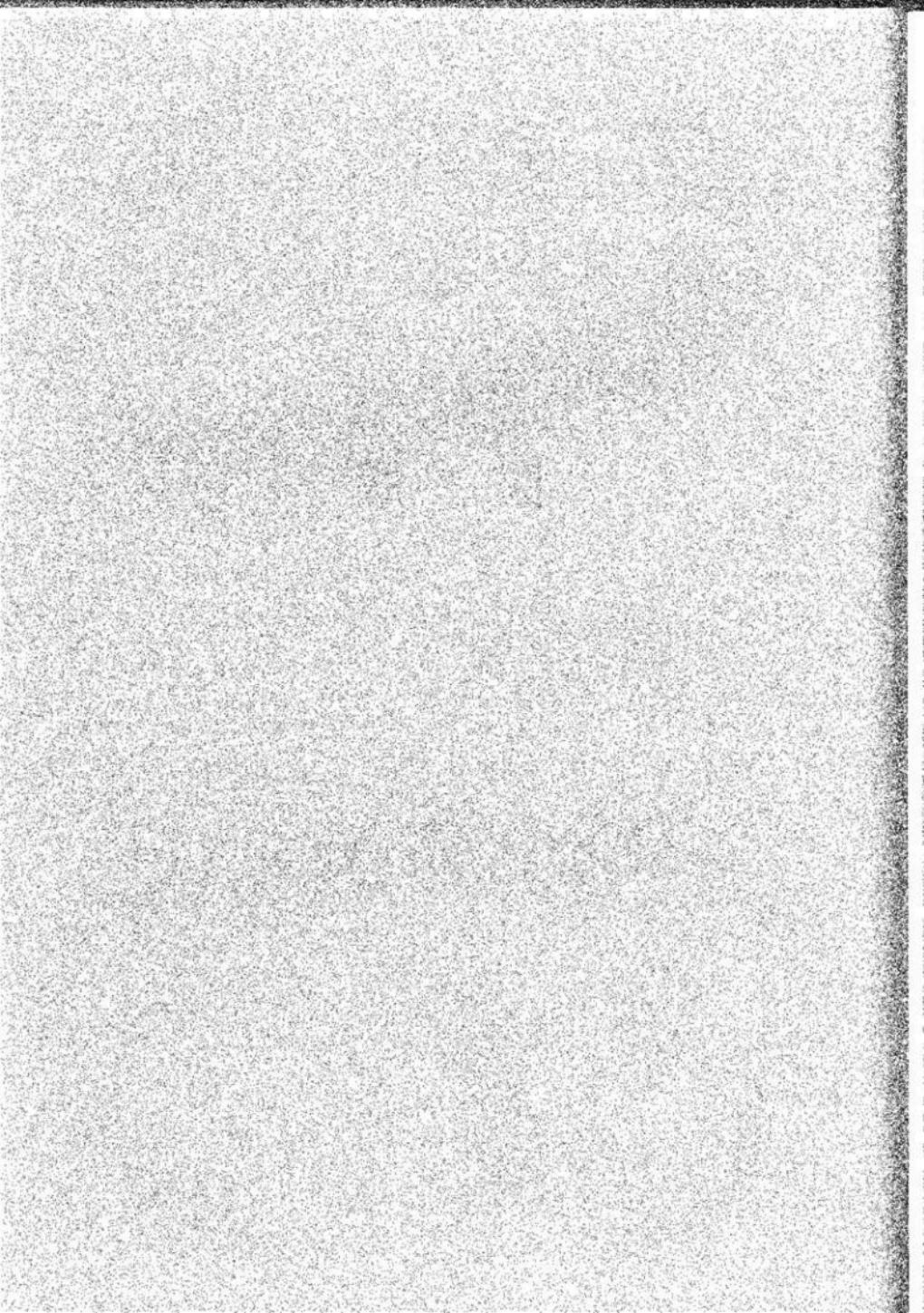
遺物番号	出土遺構	種類 器種	法量(cm)		調整		色調		胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面		
61	8号上坑	器台		17.6		風化著しい	風化著しい	淡黄橙	にぶい橙	砂粒、細砂粒を多 量に含む 透し孔4個 現存
62	〃	(打製石鑿)								(石器計測表) 参照
63	8号ピット	(磨製石鑿)								(石器計測表) 参照
64	一括	(打製石鑿)								(石器計測表) 参照
65	〃	(敲石)								(石器計測表) 参照
66	〃	(砥石)								(石器計測表) 参照
67	〃	(敲石)								(石器計測表) 参照
68	試掘	壺	29.4			風化著しい	風化著しい	淡黄橙	にぶい黄橙	砂礫、砂粒を多く 含む 貼付穴等

### 出土石器計測表

遺物番号	出土遺構	器種	石材	(cm) 最大長	(cm) 最大幅	(cm) 最大厚	(g) 重量	備考
39	4号溝状遺構	磨製石鑿	粘板岩	2.41	2.22	0.21	1.55	
40	〃	磨製石鑿	頁岩	3.4	2.2	0.2	1.66	
54	1号周溝状遺構	石包丁	頁岩	4.1	8.7	0.45	25.44	6孔
56	3号上坑	敲石	砂岩	10.2	9.0	4.9	680	
57	〃	凹石	砂岩	12.4	10.1	6.15	1175	
62	8号上坑	打製石鑿	安山岩	1.6	1.35	0.3	0.63	
63	8号ピット	磨製石鑿	頁岩	2.0	1.3	0.2	0.4	
64	一括	打製石鑿	安山岩	2.0	1.8	0.35	0.62	
65	〃	敲石	頁岩	9.1	7.6	5.8	53.5	
66	〃	砥石	砂岩	10.2	3.6	1.38	82.98	
67	〃	敲石	砂岩	7.7	5.6	3.5	200.0	

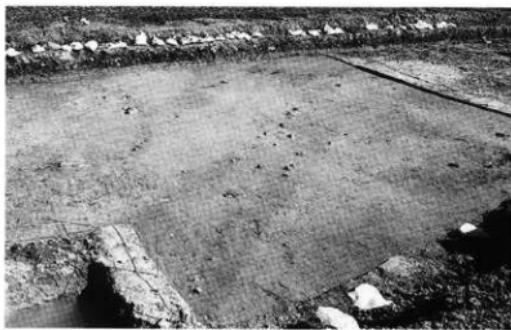


# 図 版





図版1 黒太郎遺跡全景



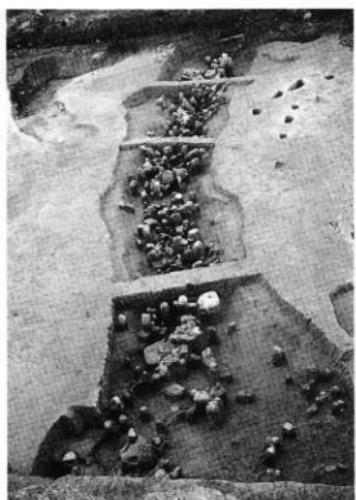
図版2  
1号周溝状遺構・2号溝状遺構検出状況



図版3 3号溝状遺構検出状況及び遺物出土状況



図版4 3号溝状遺構遺物出土状況・1



圖版 5 3号溝状遺構遺物出土狀況・2



圖版 6

3号溝状遺構遺物出土狀況・3



圖版 7 4号溝状遺構遺物出土狀況



图版 8 6号周溝状遗構遺物出土状况



图版 9 1号周溝状遗構完掘状况



图版 10 1号周溝状遗構遺物出土状况



图版11 1号周溝状遺構石包丁出土状况



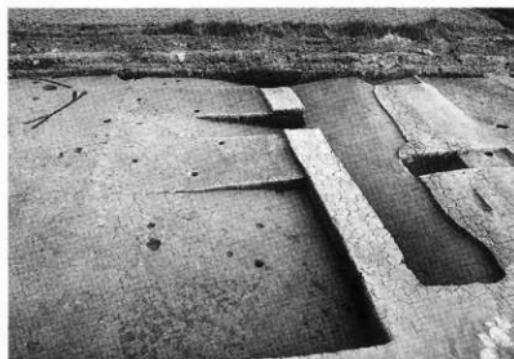
图版12 2号周溝状遺構完掘状况



图版13 黑太郎遺跡完掘状况・1



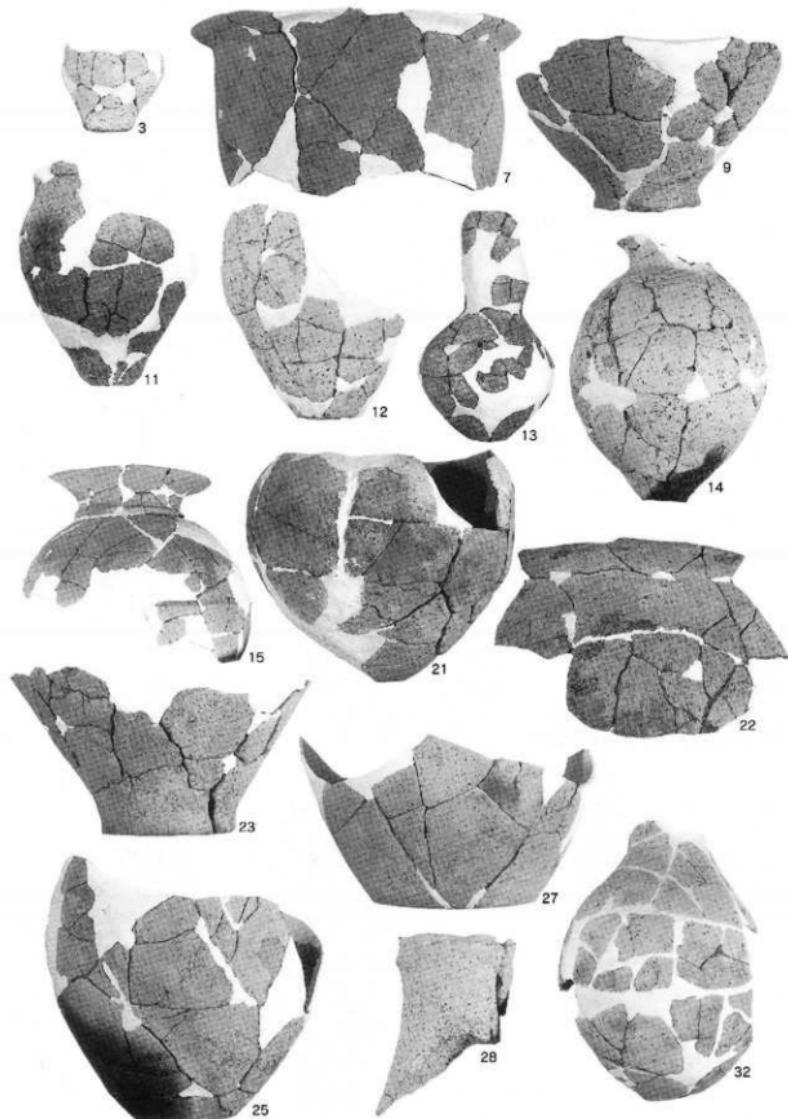
图版 14 黑太郎遗跡完掘状况・2



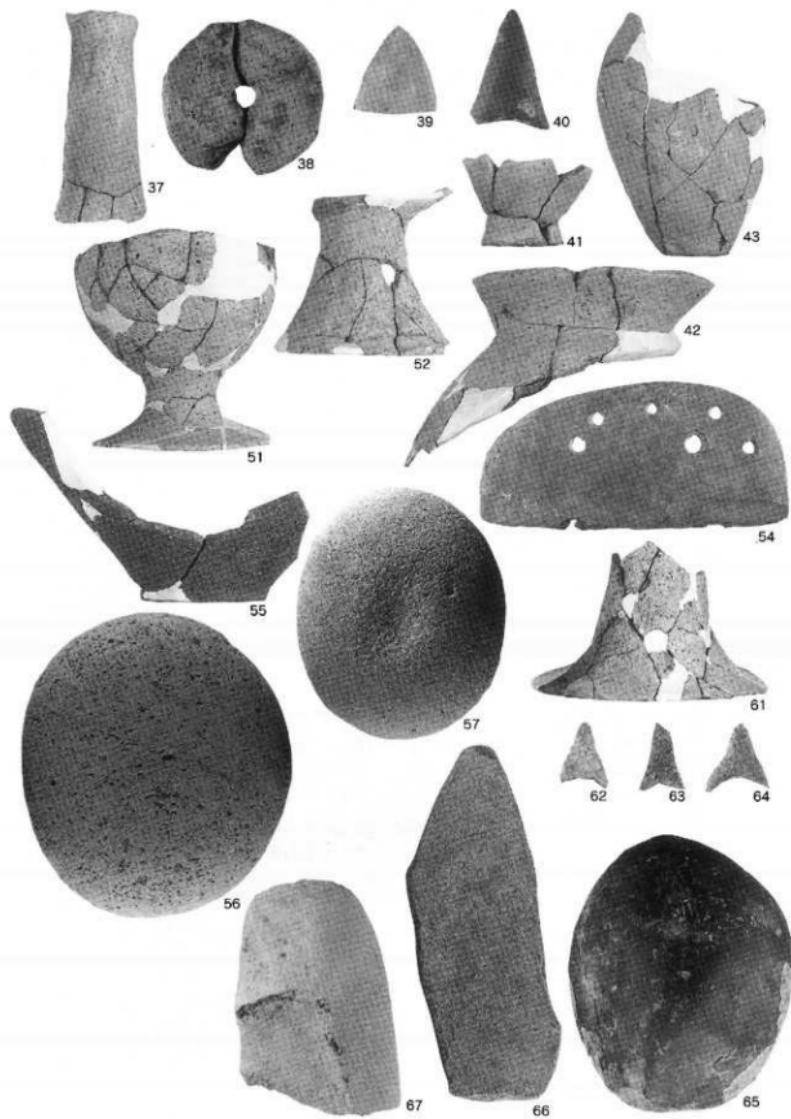
图版 15 黑太郎遗跡完掘状况・3



图版 16 黑太郎遗跡完掘状况・4



図版17 出土遺物 (1)



図版18 出土遺物 (2)

# 報告書抄録

ふりがな	くろたろういせき							
書名	黒太郎遺跡							
副書名								
卷次								
シリーズ名	宮崎市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第45集							
編著者名	宇田川 美和							
編集機関	宮崎市教育委員会							
所在地	〒880-0805 宮崎県宮崎市橘通東1丁目14番20号 TEL:0985-25-2111㈹							
発行年月日	西暦 2000年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号					
くろたろういせき 黒太郎遺跡	みやざきけん みやざきし 宮崎県宮崎市 みなみかからこうあぐくろたろう 南方町字黒太郎	45201		31° 57' 20"	131° 25' 35"	19980928 19981114	511.75	携帯電話 電波基地局 建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
黒太郎遺跡	集落	弥生	溝状遺構、周溝状遺構、土坑、ピット群	弥生土器、石包丁、磨製石鎌、砥石、閃石				

宮崎市文化財調査報告書第45集

## 黒太郎遺跡

2000年3月

発行 宮崎市教育委員会